

豊かな感性を育む図画工作科の指導

— 年間を通した題材の展開 —

兼 柵 透

1. 初めに

私たちは、日々いろいろな形で自分の思いを表現している。表現することにより、自己を安定させたり、他者とコミュニケーションをとることができる。他者とコミュニケーションをとるということは自己の世界を広げていくことでもある。

日々の児童の様子を見ているとそれぞれに得意な表現方法があることに気づく。学校生活の中でそれぞれの児童のそれぞれの表現方法を伸ばしたいと考える。

自分なりの自己表現の方法を身につけておくことは、将来的な視点で見たとときの余暇の過ごし方、行動の統制の仕方など、生活を豊かにすることにつながる。これは本学級のめざすところである「たくましい生活力を高める」ことにつながると思う。

図画工作科における指導は、自己の表現する方法の一つを学ぶ場だと考えて指導してきている。そのために、児童それぞれに得意な表現方法を身に付けることが、図画工作科における課題であると思う。

児童の成長を考えたとき支援としての指導は、ある一題材として終わるのではなく、長期的に指導計画を立てなくてはならない。そこで今年度は、年間を通して題材を計画する中での指導を考えた。

なお今回の実践は、中学年組（3・4年生）の実践である。

2. 実践事例

(1) 年間の題材

① 題材を設定するにあたって

題材を設定するにあたっては以下の事に留意した。

ア 本学級の児童の実態は様々である。(別表 児童の実態と課題参照) そのため、どの児童にも受け入れられる素材を使用した題材を構成していかなくてはならない。

そのために必要な要素としては、

自分が表現したい物を容易に表すことができること。



このことはすなわち達成感が得易いということが必要になってくる。

「達成感」すなわち「自分が～した。」という満足感である。この満足感を得る事は次の活動意欲につながり、能動的な活動へと発展すると考えられる。

イ さらに児童の実態から

○発達課題的な視点より、基本的で、大きな動きができる活動・・・ダイナミックな活動ができること

○触覚遊びを中心とした活動ができること

を二本の柱として年間の指導計画を設定した。基本的な身体表現ができることは、自ら活動する意欲を高めると考えたからである。

その結果、年間の指導計画の中に中心として取り入れていったのが「描いてみよう」「フィンガー

ペインティング「土粘土」である。

図画工作科年間指導計画案

月	題材	目 標	指 導 内 容	備 考
4	描いてみよう	クレパスで色々な色を使い思いのままに表現できるようにする。	クレパスで自由に描く。 好きな物を描く。	ローラーペインティング
5	友達の顔	友達の顔をよくみて描くことができるようにする。	互いに向き合い描く。	
6	おうちをつくろう	・フィンガーペインティングに慣れるようにする。 ・箱を使っての造形遊びを経験する。	・素材の異なる絵の具でフィンガーペインティングをする。 ・段ボール箱をつかって自由に遊ぶ。	土粘土に関連 ロボットを作ろうに関連
7	ロボットを作ろう	箱を素材に形あるものを作ることができるようにする。	あき箱や、段ボール箱などを使って、ロボットや家を作る。	
7	船を作ろう	釘、金槌、鋸の使い方を理解し、使うことができるようにする。	木を素材に、釘、金槌、鋸を使って遊ぶ船を作る。	
9	きれいな箱	自分の作品を飾ろうとする意識をもてるようにする。	あき箱を素材に色紙、クレパス等で作る。	
10	自分の顔	細かいところをよくみて表情のある顔を描くことができるようにする。	クレパス、水彩絵の具で自分の顔を描く。	
	色々な出来事	色々な行事（経験したこと）を絵で表現できるようにする。	サインペン、水彩絵の具で描く。	国語科に関連
11	ローラーペインティング	ローラーペインティングに慣れ楽しんでできるようにする。	ローラーを使って模造紙に自由に表現する。	紙版画に関連
	はっぱで作ろう	木の葉を素材にその特徴をいかした作品を作ることができるようにする。	野外観察で採ってきた木の葉を使って作品を作る。	
12	粘土 ①	土粘土の特性に気付くようにする。	土粘土を使っておだんごや、お弁当を作る。	
	クリスマスのかざり	自分なりに紙を利用して飾りを作ることができるようにする。	色紙や画用紙でクリスマス会に必要な飾りや、帽子などを作る。	総合学習に関連
1	凧をあげよう	自分が遊ぶものを作る、楽しく遊べるようにする。	ビニールでぐにゃぐにゃ凧か、ダイヤ凧を作る。	
2	鬼を作ろう	紙袋を素材にばくばく鬼を作ることができるようにする。	紙袋を使って鬼の面を作る。	総合学習に関連
	スタンプ遊び	スタンプ遊びのおもしろさに気付く、楽しむことができるようにする。	身近にある物を使ってスタンプ遊びをする。	紙版画に関連
3	紙版画	紙版画を経験する。	身近な題材で紙版画をする。	
	土粘土 ②	土粘土を使って簡単な作品を作ることができるようにする。	おだんごや板をもとに作品を作る。	

*「えがいてみよう」は表記していないが、月に一回程度、年間を通して行う。

*なお指導計画は主に図画工作科単独で行うものを表記しているため総合学習の一貫として行うものは記載していない。

(2) フィンガーペインティングの指導 題材「おうちをつくろう」

① 題材について

子どもたちの表現は多様である。それは個々の思いが異なるからであり、表現方法が多様であるからである。これらのことからをふまえて絵画の表現を指導する場合、個々の発達段階や表現方法に対応できる題材を容易しなければならない。本題材では、中心的な題材として「フィンガーペインティング」を設定した。フィンガーペインティングは、直接手を使っての活動のため、感覚的な

刺激を得ることができ、発達を十分に促すことができる。また道具を必要としないため技能的な側面で児童が抵抗感を持たなくてすむと考えたからである。

さらに個々の創造性に応えるために段ボール箱を積み木としたダイナミックな活動を考えた。活動する中で、他の児童を意識しつつある本学級の児童にとって自然な関わりが期待できるからである。

② 児童の実態と課題

本学級の児童は3年生3名（男子2名、女子1名）4年生（男子2名、女子1名）である。

本単元に関する児童の実態と課題は以下の通りである。

	児	実 態	課 題
描 く	⑦	形や特徴を意識して描くことができる。活動しながら描く。	自分が表現したいものをイメージしながら描くことができるようになる。
	⑧	形がはっきりしているものや、自分なりにイメージを持っているものを意識して描くことができる。	自分が経験したことを絵画で表現することができるようになる。
	⑨	なぐり描きの段階である。描く感触を楽しむことができる。	描く感触をしっかりと楽しむことができる。
	⑩	人物や動物などそれぞれの特徴を意識して描くことができる。	自分が描きたいものの特徴を表現することができるようになる。
	⑪	経験したことや、描く対象の特徴を意識して描くことができる。	自分が経験したことの一場面を描くことができるようになる。
	⑫	自分のイメージを持って描きたいものを自由に描くことができる。	情景や場面などを詳しく描くことができる。
他 児 と の 関 わ り	⑦	他児からの働きかけで、自分から積極的に他児に関わることができる。	自分から働きかけて他児と一緒に活動することができるようになる。
	⑧	特定の児童の行動や活動を意識しており、他児の活動をみて活動することができる。	他児と活動のやりとりができるようになる。
	⑨	指導者の言葉がけで、他児に関わることができる。	他児に対する意識を持つことができるようになる。
	⑩	他児を強く意識して活動することができる。	自分から他児に関わって活動することができるようになる。
	⑪	自分から積極的に他児に働きかけることができる。他児と関わることを好む。	他児の活動を考えながら、関わりを持つことができるようになる。
	⑫	同じクラスの女児に働きかけて活動することができる。	同じクラスの児童にも自分から働きかけることができるようになる。

なおフィンガーペインティングは学期に1回ずつ行い、「手でかこう」「ねんど」といった掌全体や腕を使って描いたり造形遊び的な題材に関連させていく。

③ 指導目標

本題材の指導目標として3点を考えた。

- 1 フィンガーペインティングを楽しむことができるようにする。
- 2 フィンガーペインティングで、手のひら全体を使って活動できるようにする。
- 3 友達と一緒に遊ぶことができるようにさせる。

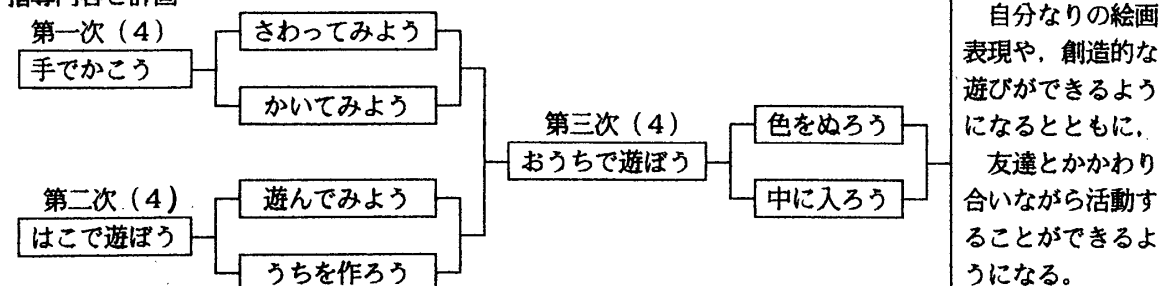
指導目標の中に、技能的なものだけでなく、態度面とも考えられる他児への意識、集団意識に関

する項目をも目標とした。

④ 指導内容と計画

全過程を3段階に分け、計10時間で行った。

指導内容と計画



⑤ 指導の実際

ア 手でかこう

第一次では、フィンガーペインティングに慣れるための塗りたくり遊びを行った。児童の感触に対する抵抗感をなくするために、フィンガーペインティングのためののりをつくる作業から児童にさせるようにした。素材としては、1回目は、紙粘土を水に溶いたもの、2回目は小麦粉で作ったのりを使用した。

児童が行った活動は、以下の順である。

1 回 目	2 回 目
① 紙粘土をこねる。	① 小麦粉のりにさわる。
② 水を加えて、手でねる。	② 食紅を入れて手で混ぜる。
③ お湯で溶いた食紅を入れ手で混ぜる	③ 感触遊び
④ 感触遊び	④ 画用紙に描画
⑤ 描画	

のりのような感触に対して抵抗感を示すであろうと考えていた児⑩が、「つくる」という活動を通して徐々にのりの感覚に慣れていき、描くことに対しても抵抗がなくなり、自分なりの絵を楽しむことができていた。

描くこと、感触に対する抵抗感のない児⑫は、素材になれることで、2回目には、自分なりの描き方を工夫することができた。感触を楽しむことのできる児⑪は、ダイナミックな活動となり、指導者②の腕に塗りたくったり、用紙に対しても画面いっぱい描き、感触を楽しむことができた。

イ 箱であそぼう

第二次では、段ボールのあき箱をたくさん用意し、それを積み木代わりにした自由遊びを行った。授業の形は、指導者が、基本的な形（児童にとってのモデル）をつくり、「こんなのができるよ。」という形で紹介をしていった。箱での遊びに慣れるにつれ、活動もダイナミックになり、箱の中にはいたり、箱をかぶってロボットになって他児と「戦い」をする児童もいた。

自由な活動のなかで、6人の児童は、活動はダイナミックになり、その中で、児⑧は、他児の活動を見、他児が箱を投げ始めると同じように箱をどんどん投げて、そのこと自体を楽しんだり、箱を積んだり他児と一緒に活動を楽しむことができた。同じように児⑨も静的な活動を他児を見ながら、自発的に行っていた。

二回目は指導者が「おうちをつくらう。」と働きかけて、「家」を作る計画にしていたが、児童が1時間目の活動の中で作り出していたためか、2回目の活動は、うちを創るのではなく、家財道具を創る活動となった。児童は、「うちのなか」という意識があるためか、ベッドや机、椅子、ふとん、まくらまで、段ボールの箱で創り、児⑦は、ドアまで作り出した。

ウ おうちであそぼう

まず、フィンガーペインティングで自分たちでつくったうちを塗ることから始めた。目標は、以下のように定めた。

○自分なりの表現でうちの壁をぬることができるようにする。

○友達と色を合わせたり、一緒にうちの壁を塗ることができるようにする。

(学習展開については 本校『初等教育』58号参照)

うちを乾かして、1学期間自分たちのうちとして学校生活の中で使用するようにした。

(3) 題材「ローラーペインティング」

① 指導の概略

「フィンガーペインティング」や「自由に描こう」により模造紙大の用紙に対する「描く」という抵抗感がなくなってきたのでローラーペインティングを行うことにした。

方法としては今までパスで描いていた代わりに水性カラーインクのついたローラーで模造紙大の絵に描いていくようにした。ねらいとしては

○ローラーを転がす感触を得る。(感覚遊び)

○画面いっぱいに展開される色を楽しむ。

とした。また、今後紙版画を展開するにあたり、

○ローラーに慣れる。

といったところも加えた。

指導時間としては、2時間を1単位時間とし、

1. ローラーの扱い方になれる。

2. 自由に描く。

3. 型抜きをする。

と3段階に展開していった。

2) 児童の様子

児⑦⑩が大変意欲的に取り組んだ。こういったダイナミック題材であると互いに戦ったり、変身したりすることが多く「描く」事を忘れがちであったが、描くことに夢中になっていった。

ローラーの扱い方に慣れるにつれ、児⑩⑫はローラーを使って絵を描いていった。特に児⑫は色も変え、細かな所はローラーの横で描くなど描き方にも工夫を加えていった。〈写真1〉

児⑧⑨は今までの描く場合には単色のみで描いていたのが、自ら色を換えていった。児⑧は、画面いっぱいを塗り、満足しては次の要求をしていった。

(4) 題材「土粘土」

①題材について

粘土は、可塑性・粘性という他の素材には見られない優れた特性を持ち、自分が表現したい物を容易に製作することができる。製作という過程において、技術的な側面が要求されるが、粘土の持っている特性から、感触の楽しみも味わうこともできる。よって、『さわってみよう』『作ってみよう』という意欲が自然に湧いてくる素材であるといえる。作業が技術的に得意でない児童にとっても、作品を製作ということにおいて、失敗感をほとんど感じさせず、完成したという満足感や自信を持たせることができる。自分が思い描くものを完成したという喜び、自信は、ひいては日常生活における積極的態度へとつながると考えられる。

粘土を直接手で触ることは、触覚に刺激を与えることになり、情緒の安定をもたらす。またつまんだり、ちぎったり、こねたりする活動を通して、手指の機能を高めるという養護・訓練的な指導も可能である。

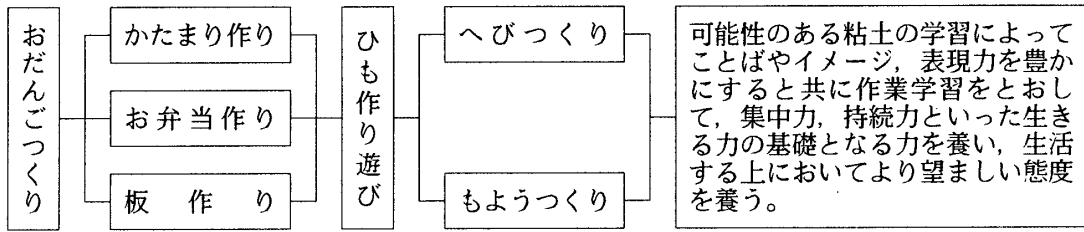


〈写真1〉

② 指導内容と計画

第一次（４）

第二次（２）



③ 指導の実際

「土粘土①」の１時間目の授業は以下のように展開していった。

ア 本時の目標

1. 土粘土の感触を楽しむことができる。
2. 掌全体を使って土粘土を丸めることができる。

イ 準備物 土粘土，粘土板，弁当箱用ケース

学習指導案

学 習 過 程	予想される活動	指 導 上 の 留 意 点	
		全 体	個 別
<p>1. あいさつをする。</p> <p>2. 粘土を知ることを知る。</p> <p>用具の等の名を知る</p> <p>土粘土 粘土板</p> <p>3. 自由遊びをする。</p> <p>感触 操作</p> <p>かたさ 温度 つまむ ちぎる にぎる 丸める</p> <p>4. 弁当を作る。</p> <p>つまむ にぎる 丸める</p>	<p>2. ○活動に対する意欲を示すであろう児⑩⑪⑫</p> <p>○あまり活動に意欲を示さないと思われる児童。⑦⑧⑨</p> <p>○粘土や粘土板を欲しがらるであろう⑦⑩⑪</p> <p>3. ○積極的に自分のつくりたいものを作って行くであろう。 児⑦⑩⑬</p> <p>○自分からは活動することが難しいと思われる児童⑩</p> <p>4. ○次々に弁当を作り、回りの大人に持って行くのであろう。⑩</p> <p>○弁当は作るが、なかなか発表するができないと思われる児童。⑩</p>	<p>1. 学習の態勢づくりとして位置付け、毎時行う。</p> <p>2. ○粘土に対する意欲を持たせるために、指示の仕方を工夫する。</p> <p>○名称をはっきりさせるために板書する。</p> <p>○名称を確認する際、学習に対する意欲を持たせるために、クイズ形式で行う。</p> <p>○粘土，粘土板は、当番が配るようにする。</p> <p>3. ○土粘土の感触に慣れさせるために自由に遊ばせる。</p> <p>○つまむということを意識させるために自由遊びに入る前につまんでちぎる操作を見せる。</p> <p>○粘土が硬くて操作できない児童には練ることで柔らかくなることを知らせる。</p> <p>4. ○箱を提示する際には意欲を持たせるために中にお弁当を入れたものを提示する。</p> <p>○提示した弁当は、指導者②が食べるまねをする。</p>	<p>1. 号令は当番の役とする。</p> <p>2. ○児⑧⑨にはすぐ前で、具体物を示すことで、確認するとともに、指導者②も、その都度確認する。</p> <p>○児⑦⑩⑪⑫には粘土や、粘土板はすぐには、渡さないようにし、名称を確認したら渡す。</p> <p>3. ○児⑧⑨が活動を起こしにくい場合には、指導者が、側で示範したり、声かけをすることで活動への方向性を示す。</p> <p>○児⑩には、称賛を中心とした声かけで、活動意欲を持たせる。</p> <p>4. ○児⑦が、球をつくれぬ場合は、指導者が、側で具体的な示範を示す。</p>

5. <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">かたづけをする。</div>	5. 自分から片づけに参加することが思われる児童⑧⑨	5. 片づけに意欲的に取り組ませるために、自ら行っている児童には、しっかり称賛する。	5. 児⑧⑨には具体的に活動を示すことで片づけさせる。
6. <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">あいさつをする。</div>		6. 学習の終わりとして位置づけ、毎度行う。	6. 号令は当番の役とする。

この授業の中で児⑨は、自分から素材に関わっていきこうとした。初めは感触あそびをおこなっていたが、弁当箱代わりの箱を提示するところから「ホットケーキ」や「ケーキ」と言いながら、次々と作品を作っていた。児に「これなあに。」と尋ねると「ホットケーキ」「ケーキ」という答えが返ってきた。このことは児は自分なりのイメージをしっかりとって作品を作り、作りたいという意欲を表現したことになる。

児⑨だけでなく、他児も弁当箱を提示することにより、お団子、おむすび、ウインナーなど、具体的にイメージしながらどんどん作っていた。ちょうど教育実習時で、教育実習生を相手にお弁当を売ったり、プレゼントしたりと活動の幅も広がっていった。

(5) 題材「描いてみよう」年間を通した自由表現

① 指導の概略

「描いてみよう」では基本的に児童の自由表現とした。模造紙、パスを用意し、児童6人が教室の床に広がり自由に絵を描いていくわけである。模造紙については、児童自分の意志で、指導者に要求すれば何枚でもいように確保しておいた。多い児童で1単位時間(2時間)5枚位描くことになった。

② 児童の変化

児⑩は絵を描くといわれても、何を描いたら良いか描き方、表現方法も、戸惑う児童であった。「えがいてみよう」では、いつも⑩児と「何をかこうか。」と確認してイメージ化して描いていた。年度当初の絵は、テレビゲームの一場面であることが多く、生活の絵や友だちの絵、自分の活動の様子といった生活につながる絵は見られなかった。絵を描くことは好きであったので、このことは描く経験が少ないため、よりイメージ化し易いテレビゲームの絵を描いているのだと考えた。そこで、絵を描く前には常に、話し合い、イメージ化した上で描くようにしたり、ローラーペインティングのようなときには形が構成しやすいように型紙を与え、形になるようにした。描く前には、具体的にイメージ化し易い題材を確認しながら与えていった。



〈写真2〉

3学期になると何もいわないでも自分から描いていくようになった。また学習の絵「クリスマス会の劇の絵」〈写真2〉も鬼と戦う自分を画面いっぱいに力強く描くことができた。

児⑧は当初画面いっぱいに黒のパスでぐるぐると描いて「おわり。」と言ってすぐに活動を終わる事が多かった。⑧児の日常生活を見てみると「描く」という経験が十分でないと思われた。そこで「おわり」となると要求するだけ模造紙を渡し、次々に描くだけ用紙を渡していった。そのうち画面の中心を分けて描くようになり、色を使い分けるようになり、自分で描きながら遊んでいる姿が見られるようになっていった。最近では用紙を渡すと具体的に形になった「アンパンマン」や「かにさん」を描いてくる。絵を描くということに対して休み時間には児童用黒板に絵を描くなど積極的になってきていると思われる。今後の変化が楽しみである。

児⑨も「ピンク」が好きでパスの中でもそれだけがなくなるほどの消費で絵としては円錯画の段階であった。当初手から伝わってくる感覚を楽しんでいる感じであった。この児童も運動の様子から考えて未経験の部分が多いと考え、児の活動を肯定することを中心に児⑧と同様に指導した。最近では自分から色を変え様々な色でも楽しむようになってきている。

3. 考 察

(1) 年間を通して指導を構成したことはどうであったか。

単元だけの指導ではなく年間の指導をトータルして児童の様子をとらえてきた。児童の成長を考えたとき一つの題材だけではその評価が難しい部分がある。児⑧⑨の変化は単位時間、題材だけの変化ではとらえにくかったであろう。年間をトータルするという視点において児童の成長をとらえることができたと考える。しかし逆に、長期間で児童を見てきたために、題材を展開する過程において、「この支援をしたから、こう変わった」という分析が十分に検討できなかつたきらいがある。今後細かな手だての部分についても十分な研究を進めていきたい。

(2) ダイナミックな活動・感覚を中心とした指導について

児童の実態を考えると描き方がわからない児童もいたり、「なにか作品をつくる」という事が難しい児童もいる。児童は感覚遊びを十分にした上で、形としての表現が出てくる。児童⑦⑩は自分が描きたい人物や友だちが形とならず、自らが活動していた年度当初に比べ十分に身体を使った表現を認めることで、作品を製作しようという意欲も出てきた。最近では形が十分に表現できるようになり、絵という作品の中で、様々な人物との関わりを表現することができるようになってきた。作品に対して自分でも満足しているようで、指導者に対して説明することも多くなってきた。このことは十分にダイナミックな活動を中心に設定してきたためだと考える。

児⑨にとっては、生活面全般について感覚的な刺激を十分与えることが、必要であると思われる。そういった活動が、年間を通して確保できたことは評価に値すると考える。

(3) 達成感を得易い素材を中心に題材を設定したことはどうであったか。

フィンガーペインティングや土粘土といった素材を中心に題材を考えていった。いずれの児童も感触に慣れるまでいくらかの抵抗感を示していたが、感触に慣れるとそれぞれの思いで作品を作っていた。一つの作品ができあがると次の作品へとイメージが広がっていった。指導者の側としても、児童の作品をイメージしたものと判断できるため肯定的な評価を行うことができた。このことが児童を主体的な活動者としたと考える。また、児⑩は、自ら素材にはたらきかけることが、苦手であったが、ローラーペインティングなどでは、型紙を提供することで、具体的な見通しをイメージ化することができた。指導者は、支援者として常に児童のイメージ化を助ける「もの」をタイミングよく提示する必要がある。

(4) 価値の問題

児童は様々な方法で、自己表現してくる。「絵を描く」といった活動においても児童による表現の違いがある。それを「形になっていない。」と否定するのは簡単な事である。しかし、児童の活動を表現と位置づけたときいずれの活動も肯定していかなければならない。

児童を発達途上の段階と見るとき、どういった方向にその表現方法を支援していくのかは、指導者の意図にまかせられるのであろう。そういった意味において、今後の研究が必要である。

(5) 指導者の感性の必要性

全般的に見て児⑩は「描く」ことの経験不足があると判断した。これは、本児の生活実態や描く様子から判断したのであるが、児童の絵の変化からその結果の指導は正しかったと考える。しかし他児にとってはどうであったか。指導者の感性を磨く必要を再認識させられた。